

阿部 幸大

Thomas Pynchon, *V.* における 怠惰とケア

0. 怠惰の系譜学

1 993年, “Deadly Sins” (大罪) なる特集を組んだ *The New York Times Book Review* 誌の依頼を請けて, Thomas Pynchon は, “Sloth” と題されたエッセイを寄稿している。そこで Pynchon は「怠惰」と訳すべきこの態度の系譜を, Thomas Aquinas の『神学大全』から開始し, Benjamin Franklin の Poor Richard と Herman Melville の Bartleby という二人のキャラクターの対比を経て, テレビの前のソファから動かない「カウチ・ポテト族」までユーモラスに辿ってみせた。このエッセイの意図は, 怠惰を「七つの大罪」のひとつに数えた Aquinas, ならびに時間の浪費の回避を執拗に勧告する Franklin/Poor Richard が説くような, すみずみまで自己管理のゆきとどいた勤勉さに抗して, 怠惰の価値こそを訴えることにある。Pynchon によれば, “I would prefer not to” という有名な台詞によって象徴される Bartleby 的怠惰とは, 勤勉という美名に隠れて (この場合は) 資本主義という (悪しき) 現実に対し “accepting things-as-they-are” 的態度で日々を送って顧みぬ人間こそ真に「怠惰」なのではないか——そう問い質すような怠惰である (18)。それは権力への否定の身振りとして現れるような, 抵抗の手段としての怠惰, 政治性を帯びた怠惰だといえる。

つづけて Pynchon は, ラテン語の sloth にあたる acedia には sorrow の意味も含まれることに注意を喚起したうえで, “take your own favorite list of writers after Melville and you’re bound sooner or later to run into a character bearing a sorrow recognizable as peculiarly of our own time” (18-19) と述べる。Pynchon の読者であれば, まさしくこの単語をその名に含む *Gravity’s*

2 阿部幸大

Rainbow の主人公 Slothrop はもちろん、1956年のニューヨークにおいてタイムズ・スクエアとグラント・セントラルのあいだをシャトルする地下鉄で眠ることで時間を浪費する「ヨーヨー人間」、すなわち第一長編 *V* の主人公 Benny Profane を想起するだろう。そこで同時に思い起こされるのは、*V* のもう一人の主人公である Herbert Stencil が、1945年に突如として“sleep was taking up time which could be spent active” (51) と気がつき、それまでの“slothful” (50) な生活を改めて *V* の頭文字を持つ女の探求に乗り出すという事実である。すなわち、Profane と Stencil の関係は、Bartleby 的怠惰と Poor Richard 的勤勉という関係とパラレルをなすように思われるのだ。ならば、われわれは作中で Profane が“schlemihl”という語彙で自称する怠惰さを、たんなる怠惰としてではなく、政治的な身振りとして、それも“peculiarly of our own time”な——すなわち歴史的な——態度として、読まなくてはならないはずである。

以下では、まず小説の構造分析をつうじて、第一に *V* は非政治的な小説に見えることを確認し、それが脱政治化されたりベラリズムという冷戦アメリカのイデオロギーの反映であることを指摘する。また同時に、生政治という Foucault の概念を手がかりとして、Profane の怠惰の政治性がいかに挫折させられるかを見る。そのうえで、care に否定の接頭辞が冠された単語である security (安全性) という生政治的概念が、怠惰という概念と観念史的に同根であるという事実を考慮するとき、“Keep cool but care” という有名な、しかし評価の定まらない台詞に、ケアの回復という文字どおりの意味を読まねばならないことを論じる。また、Heidegger の「死への先駆」という現存在の条件がやはりケアの回復を訴えながらも全体主義の論理と親和的であったことを想起しつつ、Agamben が論じた第二次世界大戦後の世界における例外状態の一般化という状況下において、Profane はむしろ「死への先駆」が常態化した時代における新たなケアの可能性を模索しているのだと結論し、*V* の問題意識の射程を再評価する。

1. 冷戦アメリカ小説としての *V*.

V という小説は、Profane が主人公としてふるまう「物語の現在」である1956年のニューヨークにおける群像劇を描いた「Profane 章」と、断片的で互いに独立した6つの「Stencil 章」とが交互に現れるという、いわゆ

るダブル・ノヴェルの構造をもつ。Stencil は 1901 年にイギリスの外務省に勤務する父親の元に生まれた “the century’s child” (48) とされ、1898 年のファシヨダ事件の時期におけるエジプトや (第 3 章)、ドイツ領南西アフリカにおける 1904 年のヘレロ族の虐殺など (第 9 章)、ヨーロッパ帝国主義の歴史にまつわる物語を、あきらかな歪曲を施しながら語ってゆく (この操作は作中で “Stencilize” と呼ばれる [246])。たほう、Profane は戦後のニューヨークに生活するユダヤ人青年であり、自堕落な日々を送っているのだが、夜警のアルバイトの重要な場面でアウシュヴィッツについて人体模型と問答をかわす。こう素描するだけでも、*V.* の Pynchon にヨーロッパ帝国主義とその帰結としてのアウシュヴィッツという歴史的問題を扱う意図があったことは明白だろう。

じっさい、Pynchon によるヨーロッパ帝国主義批判、あるいはポストコロニアルな側面については、90 年代に詳しく論じられている。それらは、たとえば Edward Said が *Culture and Imperialism* で “the extraordinary formal and ideological dependence of the great French and English realistic novels on the facts of empire” (35) と指摘したような、小説という文学形式にみられる排他性ゆえの自律的完結性という帝国主義的暴力 (の美学的・文化的な症候) に対して、*V.* の Pynchon がいかに自覚的であったかを示そうとする。こうした物語的安定性の裏に潜む暴力を、たとえば Ronald Cooley は “narrative imperialism” (317) と呼び、Stencil 章の語り手の不安定さを、それへの批判意識のパフォーマティヴな現れであると読むことになる。¹

しかし、帝国主義を中心的に論じる *V.* 論の多くが Profane 章にほとんど触れずに済ませてしまうという事実が示唆しているように、そうした整理は、*V.* という小説が冷戦期のアメリカに生きるユダヤ人青年が主人公であるプロットと Stencil 章とが交互に現れるという分裂的な形式のもとに書かれたことの意味を説明しないまま放置してしまう。本稿は Profane 章と Stencil 章の関係にこだわることで、*V.* がヨーロッパ帝国主義に対する反省としてだけでなく、現代アメリカ小説として書かれたことの意味を考えてみたい。

Michel Foucault は、よく知られているように、生政治あるいは生権力という概念によって近代の権力のはたらきを説明した。「生政治の誕生」と題されたコレージュ・ド・フランス講義の要旨において、これは以下のよ

4 阿部幸大

うに定義されている。

私が「生政治」と呼ぶのは、人口として構成された生きる人々の総体に固有の諸現象、すなわち健康、衛生、出生率、寿命、人種といった諸現象によって統治実践に対し提起される諸問題を、十八世紀以来合理化しようと試みてきたやり方のことである。周知のとおり、こうした諸問題こそ、十九世紀以来ますます重要な位置を占めるようになってきたものであり、そして今日に至るまで政治および経済において賭けられてきたものである。そうした諸問題を、それらがその内部において出現し深刻なものとなった政治的合理性の枠組みから切り離すことはできないように私には思われた。その枠組とはすなわち、「自由主義」である。（『生政治』 391）

すなわち、自由主義という枠組みは、その名称とは裏腹に、新たな形態の統治を生みだした。その典型的な例として、たとえば 1932 年に Franklin Roosevelt が実施したニューディールという福祉政策が、自由を保障するための介入という逆説として現れたと Foucault は言う (83)。生政治的な統治を可能にした「枠組」であるところの「自由主義」の施行の結果、われわれはつねにより多くの自由を求めるよう条件づけられ、それを達成すべく「個々人の行動様式をその最も細かい細部に至るまで毎日規則正しく引き受けるものとしての規律の技術」(82)が発達し、やがて人々はその「規律」を内面化する。Poor Richard や Stencil は、規律社会のエリートである。

柴田元幸は「アメリカ文学と帝国主義」と題された論考をまさしく Benjamin Franklin の自伝の引用から始めており、規律の遵守に至上の価値を見出す彼のメンタリティが、じつのところアメリカ（文学）における「セルフメイド・マン」という普遍的な理想の最初期の典型例にすぎないと論じたうえで、その帝国主義的傾向を指摘している (103)。柴田は同論において V. に言及し、この小説で「中心に据えられているのは...エイハブ的な強烈な個人ではない」として、「アメリカ文学における帝国主義的意志はひとまず息絶えたように見える」と結論している (111-12)。この主張はいっぽうで、すでに批判した V. の帝国主義的側面のみを扱うタイプの論とは反対の手続きで——つまり Profane 章のみに焦点化することで

——, *V.* の分裂を放置していると言える。あらゆる情報の中に自らが求める *V.* の女を恣意的に見出す, “He Who Looks for V.” (244) なる存在である Stencil のパラノイアは, 柴田の言う「帝国主義的な意志」そのものであるからだ。だが柴田の観察はたほうで, *V.* のナラティヴの形式を正確に写し取っているとも言える。つまり, 帝国主義にかかわる話題がおもにイギリス人の Stencil によって懐古的に語られ, かつ Stencil 章と Profane 章とが分裂的に配置されることで, 相対的に, *V.* が描く第二次大戦後のアメリカにおいては, たしかに帝国主義の問題が不在であるように見えてしまうはずなのだ。しかし, 「基本的に政治的な作家だと見做されている」(三浦 39) Pynchon の小説において, そもそも Stencil 章があからさまに政治的・歴史的なのに比して Profane 章がそう見えないという事態に, われわれはアンバランスを見なくてはならない。

このアンバランスは, いわゆる冷戦リベラリズムの典型的な表出である。すなわち, 冷戦アメリカの戦略は, ソ連とアメリカの関係をイデオロギー対立として記述するのではなく, 共産主義はその内容にかかわらずともかくイデオロギーなのであり, それに対してアメリカは自由という非イデオロギー的な(したがって否定することが難しい)理想のみを推進する国家としてみずからを表象するものであった。本稿が Profane 章と Stencil 章の関係を重視するのは, そのありかたが Profane 章における冷戦リベラリズムの政治性を炙りだすためである。

Profane 章と Stencil 章の違いを生政治というタームを用いつつ説明したものに, 2014 年の Christopher Breu による研究がある。その *V.* 論において彼は, Stencil 章が生政治のルーツとしてのヨーロッパ帝国主義による「殺す権力」(thanatopolitics) を扱うのに対して, Profane 章は第一世界において作動する権力が「生かす権力」としての生権力 (biopolitics) にシフトしたことを描くと整理している (77-78)。² この議論は, *V.* の分裂を放置するタイプの議論とは一線を画している。ただし, 彼は *V.* が一冊の小説として書かれねばならなかった理由は説明できていない。これは極端に言えば, 仮に *V.* が二冊の小説として書かれていたとしても, Breu の論考は作家論として成立しえたということの意味している。

V. の分裂, と本稿は述べてきたが, この表現は以下のような素朴な——しかし重要な——事実を指している。すなわち, *V.* という小説は, おお

6 阿部幸大

むねクロノロジカルに進行する Profane 章から開始されるのだが、第3章において、その時点では“the Whole Sick Crew”の一員として紹介されているにすぎない人物 Stencil が突如としてエジプトにおけるスパイ小説のパロディと言うべき物語を語りだし、つづく第4章では何事もなかったかのように第2章の続きが語られるのだ。以後同様に、必ずしも Stencil 自身が語っているとは限らないものの、Stencil 章は Profane 章のプロットを多かれ少なかれ中断するように配置されていると言える。われわれはすでに Stencil 章の不安定性はポストコロニアリティの現れと見なしうることを確認した。しかし V. 全体としてはむしろ、三人称の語り手により直線的な時間軸に沿って語られてゆく Profane 章が Stencil 章によって中断されている——すなわち、安定した現代アメリカ小説が、崩壊しつつある近代ヨーロッパ小説によってその自律性を切り崩されているという構造になっているはずである。Stencil 章のポストコロニアリティのみに注目すると、Profane 章の、そして V. 全体の不安定性が見落とされてしまうのだ。

この見落としがとりわけ問題であるように思われるのは、それが作品の半分しか見ないためばかりではない。ヨーロッパ帝国主義批判に依存することによって、全体主義的傾向を免れた自由の国として自己表象する冷戦アメリカのレトリックを反復している点が問題なのである。Fredric Jameson は、歴史を“encyclopedic”に扱うポストモダニズム文化の非歴史的傾向を“adoptive tourism”³であると批判し、その例として V. に触れている(361)。たしかに V. は、ヨーロッパ帝国主義の tourism 的傾向を Stencil に反省させるといふ形式に隠れて、じつのところ縦横無尽に tourism 的表象を取り込むことで成立し得ているアメリカ小説なのであって、これは、アメリカは自由の国ゆえいくらでも tourism を実践してかまわないという欺瞞をそのまま再現していると言える。V. の構造は、冷戦リベラリズムが依拠する二元論を脱構築すべく要請されたのである。

2. 怠惰と生政治

つぎに確認しておきたいのは、Foucault が自由主義の目標を「人口の境遇を改善すること、人口の富・寿命・健康を増大すること」と説明していることである(『安全』129)。統計としての「人口」とそれを構成する個々人は積極的介入によって永続的により良い状態へ作りかえられるべき対象

であり、Foucault によれば、その妨げになる「自由製造のコストを計算するための原理」として、「安全」という指標が導入される。その結果、「個々人に起こる偶発事、つまり、病であろうと... 老いであろうと、生において起こりうることのすべてが、個人や社会にとっての危険を構成しないようにすること」を目指して、監視と管理の体制が敷かれる（『生政治』80）。以下では Profane の怠惰がこうした生政治的統治への抵抗であることを示すが、そこでわれわれは、生権力という装置がいかに従来の政治を脱政治化——生政治化——するか、そしていかに自らを抵抗不可能な権力として作動させるかにとりわけ留意したい。

小説中、Profane は“schlemihl”という語彙で自己規定しているが、一般的には「不器用」や「どじ」を意味するこのイディッシュ語に、彼はとくに「怠惰」という性質を付与している。職業斡旋所で働く恋人 Rachel の協力にもかかわらず、失業中の Profane はかたくなに働こうとしないのであるが、苛立つ Rachel の“People can change. Couldn't you make the effort?”という言葉に対して、彼は“I don't change. Schlemihls don't change”（425）と宣言し、schlemihl に「働かない・変化しない・成長しない」といったニュアンスを付与する。この発言の前後、つまり失業中に、彼は頹廢的な芸術家集団 the Whole Sick Crew の一員になってゆく。Crew のメンバーである Fergus Mixolydian はニューヨークにおける“the laziest living being”を自称しており、また他のメンバーについても“The rest of the Crew partook of the same lethargy”と述べられているように、それは怠惰を信条とした集団である（52）。規律を内面化した勤勉な Stencil が権力にもっとも従順な個人の戯画であったとすれば、ひとまずそれとの対比において、Profane を含む Crew による自覚的な怠惰の実践は反社会的なふるまいであると考えられる。じっさい、これらは（のちに Pynchon 自身がコミットすることになる⁴）60年代の新左翼とカウンター・カルチャーの先駆的な形象であると論じられてきた。

だが、David Witzling が彼らを“resolutely apolitical bohemians”（75）と形容しているように、彼らは非政治的な集団である——というよりむしろ、冷戦期のアメリカにおいては彼らの反社会性が結果的に非政治性として現れてしまわざるを得ないという点にこそ注意すべきだ。冷戦リベラリズムの生政治が従来の政治の言語を文化と生活の言語へと翻訳することで脱政

8 阿部幸大

治化する装置なのだとすれば、Crew の怠惰の身振りもまた、sick/healthy という生政治的な二分法に回収され、脱政治化されている。⁵ この政治的去勢のはたらきに、われわれは生権力の作動を見なくてはならない。かりに彼らが「健康の増大」という生政治的強制への抵抗として sick を自称するのだとしても、結果的にその怠惰な生活は、まさしく怠惰に生きるという自由の謳歌として生政治の論理に篡奪されてしまうのだ。そのとき彼らの怠惰は、もはやひとつの文化的アイデンティティに過ぎない。Crew の限界は、冷戦リベラリズムと生政治に対する抵抗の困難を示す（コミカルな）例であると言える。それが唱導するものが自由という普遍的な理想である限り、生権力に抵抗することは難しい。

だが Stencil が “You are not of the Crew, Profane” (429) と見抜いているように、Crew の限界は、主人公 Profane の、そして V. の限界と同じではない。schlemihl として怠惰に生きるという彼の信念には内的な葛藤が見られるのであり、その葛藤は、夜警のアルバイト先で SHROUD という人体模型とかわされる「対話」の場面で顕在化し、これが V. の中心的な問いになっている。それが普通の意味での対話でないのは、じつのところ自身のペシミスティックな意見を SHROUD に代弁させてかわされる Profane の一人芝居にすぎないからである。

この場面には SHROUD と SHOCK という二種類の人体模型が登場するが、そのうち Profane と対話する SHROUD——Synthetic Human, Radiation Output Determined の頭文字——は、本物の人骨とプラスチックで再現された臓器を持っていて、その中には放射能測定器が埋めまれており、各臓器は “filled with aqueous solutions which absorbed the same amount of radiation as the tissue they represented” であるという (309)。また、このアルバイト先である Anthroresearch Associates は、 “an interlocking kingdom responsible for systems management air frames, propulsion, command systems, ground support equipment” (246) である複合企業 Yoyodyne の子会社であり、政府からの委託で “the effects of high-altitude and space flight; for the National Safety Council on automobile accidents; and for Civil Defense oil radiation absorption” (309) の調査を行っている。Breu も指摘しているように (74)、SHROUD は安全の保障という名目のもと徹底的に監視・管理される生政治的主体のグロテスクなパロディになっている。

「対話」の場面において SHROUD は、Profane に “Me and SHOCK are what you and everybody will be someday” と挑発的なことを述べ、つづけて “You mean dead?”/“Am I dead? If I am then that’s what I mean”/“If you aren’t then what are you?”/“Nearly what you are” という会話が続く (311-12)。さらに後の場面で SHROUD は、“Remember the photographs of Auschwitz? Thousands of Jewish corpses, stacked up like those poor car-bodies. Schlemihl: It’s already started” とアウシュヴィッツに言及し、Profane の “Hitler did that. He was crazy” という反駁に、“Has it occurred to you there may be no more standards for crazy or sane, now that it’s started?” と返答している (321-22)。

よく知られているように、Giorgio Agamben は、全体主義は歴史上の例外と見なすべきでなく、近代の主権概念に構造的に内包された論理の帰結であると論じ、「民主主義と全体主義とが内奥において連帯しているというテーゼ」(19)を提出した。「現代にあっては例外状態こそが基礎的な政治構造としてしだいに前景に現れ、ついには規則になろうとする」(32)、あるいは「生政治的空間としての収容所（例外状態のみに基礎を置くものとしての収容所）が、近代の政治空間の隠れた範例として現れる」(170)という彼の議論は、上に引用した SHROUD の認識と一致している。したがって上記の「対話」であきらかになるのは、ふだんの Profane はこの Agamben 的歴史観を受け入れたかのように見せかけているが、じつはそれへの抵抗の方法を模索しているということである。

であるならばここで、*V.* の最も有名な台詞である “Keep cool but care” (406; 409) を問題にしないわけにはゆかない。この台詞は、ミュージシャンである McClintic Sphere によって第二次世界大戦への反省として「戦争をしないようにクールでいろ、けれど思いやりを持って」という意味合いにおいて発され、しばしばセンチメンタルな——またはアイロニカルな——ものとして捉えられてきた。⁶ だがこの台詞はその直後でふたたび SHROUD/Profane によって繰り返されているのであり、これらは区別される必要がある。彼（ら）が発する “Keep cool but care” は、schlemihl は care を持たない存在であり、それゆえに問題がある、という自意識のリテラルな吐露として理解されるべきなのだ。いっけん非政治的な Profane 章の、もっともナイーブに思えるこの台詞に、*V.* 最大の問題意識は埋めこまれている。

3. “Keep Cool but Care”——ケアと全体主義

社会学者の市野川容孝は、哲学用語としての security の観念史を整理している。そのラテン語にあたる securus/securitas は、cura に否定の接頭辞 se- が冠されたものである。この cura が英語の care に相当し、セキュリティとは、ケアの必要から解放されている状態を指している。そして、たとえば Epikouros はこのケアのない状態を心の平静 (ataraxia) と捉え、そこに理想の心的状態を見て肯定したのに対し、Thomas Aquinas はこれを acedia と呼び替えて否定し、そこに怠惰という罪を見出した(「安全性をめぐる」74; 80-81)。

市野川はさらに、Martin Heidegger の『存在と時間』における「気遣い Sorge」を補助線として、セキュリティ概念をナチズムの問題と接続している。Heidegger による「^{ダス・マン}世人」と「現存在」という分節化は、存在者の気遣い＝ケアの有無によっており、Heidegger においてそのケアとは、よく知られた「死への先駆」である。これを保持できている主体が「現存在」であり、それを喪失した「^{ダス・マン}世人」は人間の頹落態である(＝怠惰という罪)。ただし、『存在と時間』のプロジェクトは、個人に自らへのケアを喚起するのではなく、「個人の生命にのみ目を奪われてきた従来の「安全性」のあり方を、国家＝国民という全体の生命を保障する方向...へと改めなければならない」「安全性の装置」134)と主張するものであった。つまりそれはセキュリティ状態にまどろむ主体に対して、全体に向けてのケアを促し、国家や民族といった集団の安全性にこそ目覚めさせようとするわけだ。ここに全体主義が現れる。ただし、「安全性の装置」は cura を無化するのではない。そうではなく、人びとから cura をいわば収奪し、それを無限に肥大させ、その見返りとして人びとに cura なき securitas をもたらず、そういう装置なのである」(同上)。この国家によるケアの独占と安全性の付与というモチーフの戯画化を、すでに SHROUD において確認した。

われわれは Stencil 的個人主義と Heidegger 的全体主義、そして Profane 的敗北主義を比較することで、上記の問題をケアの配分^{エコノミー}の問題として捉えなおすことができる。すなわち、Stencil のケアはいわゆる「自己への配慮」の極端な例であり、そのすべては彼個人にむけられていた。それに対して Heidegger の場合は、ケアの総体は権力によって全体へと徴発されている。

そして Profane の態度は se-curity としての怠惰、いわばケアを放棄した状態である。Profane が想像できずに苦しんでいるのは、これらへのオルタナティブだ。彼が問うているのは、もはや「死への先駆」が常態化したエントロピックなポスト・アウシュヴィッツの時代において、いかに別様の方法でわれわれはケアを回復しうるか、という問題であるほかない。これが *V.* の問いである。

「行き止まり」を意味する “dead end” や “cul-de-sac” といった語彙とイメージが頻出する *V.* は、そうした外部の想像不可能性のまえで立ちすくむ、いかにもポストモダニズム的な小説であると結論することもできる。だが、もう一步だけ先に進んでみよう。

いま思い出すべきなのは、本稿の冒頭で引いたエッセイにおいて、Pynchon が sloth の語源には sorrow の意味が含まれるという事実にあえて注意を喚起し、“a character bearing a sorrow recognizable as peculiarly of our own time” (“Sloth” 19) を見出すよう促していたことである。そしてこの sorrow という語彙は Heidegger の Sorge と語源を共有している。したがっていま、怠惰という語彙を、security につらなるケアなき怠惰と、sorrow に特化したケアとしての怠惰、これらふたつの系譜に区別する必要がある。そして怠惰の失策を描いた作品という陰画的な評価を乗り越えるためには、後者の怠惰、すなわち sorrow の表出を見なくてはならない。

V. において sorrow が重要なかたちで問題化される場面は3つある。以下、それらを逆順で確認しよう。Profane は徐々に Whole Sick Crew に接近してゆくと述べたが、その過程とともに、いま区別した分類で言えば、彼の怠惰は sorrow から security へと、いわば退行してゆく。かくして、時系列的に最後に sorrow が問題とされるのは、すでに引用した “Schlemihls don't change” という開きなおりの発言に対して Rachel が “Can't you stop feeling sorry for yourself?” と批判する場面である(425)。ここにもやはりエコノミーの問題が見えている。物語終盤における Profane は、sorrow を自己にしか向けないのだ。

それに対して2番目の場面では、彼は以下のような衝動に襲われている――

It was a desire he got, off and on, to be cruel and feel at the same time sorrow

12 阿部幸大

so big it filled him, leaked out his eyes and the holes in his shoes to make one big pool of human sorrow on the street, which had everything spilled on it from beer to blood, but very little compassion. (149)

この奇妙な記述において注目すべきなのは、彼から湧き出る“human sorrow”が、“on the street”における“compassion”の不在と対照されていることである。彼が以後、“sorrow”と“to be cruel”という相矛盾する態度のうち、後者をおもに Rachel に対して) 選択してしまうのは、いくら“sorrow”を發揮したところでそれが他者の“compassion”に出会う見込みがないためだと言える。ここに彼のフラストレーションを見てよい。Profane にとって“sorrow”が政治的あるいは歴史的に意味を持つためには他者との相互作用が必須なのであり、その情動的な基盤が失われてしまっていることが“but care”の実践を困難なものにしている。

そしてこの一節は、下水道におけるワニ退治のアルバイトの場面の直後に、しかも“In which Profane returns to street level” (141) とわざわざ地下と地上の対比が強調されたうえで、配置されていることに注意せねばならない。はたせるかな、われわれは直前の場面において、地下の Profane に sorrow の表明を見出すことになる――

The alligator had turned to face him. It was a clear, easy shot. . . .

“Can I let you just go?” . . . And then he saw the alligator couldn't go any further. Had settled down on its haunches to wait, knowing damn well it was going to be blasted. . . .

“I'm sorry,” he told the alligator. He was always saying he was sorry. It was a schlemihl's stock line. He raised the repeater to his shoulder, flicked of the safety. “Sorry,” he said again. . . . He fired. (128-29)

この“stock line”を、しかし、彼は別の場面でほとんど発していない。⁷ 誠実な sorrow の発露としてはこれが作中における唯一のものであり、それは地下という無意識的な場所でのみ、かろうじて観察されるのだ。そしてこの sorrow が重要なのは、これが上記の Stencil の個人主義と Heidegger の全体主義という両極のエコノミーに欠けているケア、つまり、他者へと

向けられたケアであるためである。Profane の目指す “peculiarly of our own time” としての sorrow, それは、自己と全体へと二極化したアウシュヴィッツ以後のケアのエコノミーから逃れるための怠惰, すなわち, 他者という中間項をふくめたケアの配分方法を想像する方法としての, あたらしい怠惰である。われわれはこの結論を, *V.* 以後の Pynchon 作品を怠惰とケアの問題から再定位するための足がかりにできるだろう。

註

本稿は 2016 年 9 月, 日本アメリカ文学会の東京支部例会にて「帝国主義・アメリカ・生政治——戦後小説としてのトマス・ピンチョン *V.*」というタイトルで口頭発表した原稿を改稿したものである。

1 あるいは Ivison は, Pynchon のキャラクターたちのアイデンティティが不安定である理由を, ヨーロッパ近代が抑圧した暴力が植民地において——たとえば「現地人には何をしても許される」といった形で——解放され, それが戦後においてヨーロッパ内部へと回帰する結果であると説明している (139)。また, ポストコロニアル研究が興隆を見たのが 80 年代から 90 年代にかけてであったことに鑑みれば, 63 年に発表された *V.* の先駆性は特筆すべきものである (Harris 201)。ほかに Breu (77-84) も参照。

2 ヨーロッパの超越型権力からアメリカの内在型権力 (= グローバリズム) への移行という Hardt と Negri の議論も参照 (164 など)。あるいは Deleuze は, 20 世紀の生政治の質的変化の分水嶺を第二次世界大戦に見, そこで権力が規律型 (ディシプリン) から管理型 (コントロール) へと移行したと簡潔に整理している (356-58)。

3 “encyclopedic narrative” という概念を提出した Mendelson は, とりわけ Pynchon について “Gravity’s Encyclopedia” というエッセイを書いている。

4 とりわけ Freer を参照。

5 三浦玲一の「病とヒッピーと新自由主義」は, Pynchon の第 4 長編 *Vineland* を, 60 年代の左翼運動もまた新自由主義に取り込まれる結果に至ったことを描いた作品として論じている。

6 1982 年においてすでに Tony Tanner が “That last formulation [“Keep cool but care”] has been criticized as being too easy—slick and glib, like an advertising

14 阿部幸大

slogan” (50) と総括している。もっとも大きな影響力をもった初期の否定的な意見として Poirier (24) を参照。また Seed (81) と Tanner (*City* 161) は反論を試みているが、どちらもこの台詞にアイロニー以上のものを読みとっていない。

7 本文で言及した箇所のほかに、小説終盤、職務怠慢によってアルバイト先が火事になってしまったとき、“It’s stupid, but it’s something I say all the time. A bad habit. So. Anyway. I’m sorry” (408) という場面がある。この露悪的なまでに不誠実な態度がワニへの sorrow と別のものであることは明らかだ。

引用文献

- Breu, Christopher. *Insistence of the Material: Literature in the Age of Biopolitics*. U of Minnesota P, 2014.
- Cooley, Ronald W. “The Hothouse or the Street: Imperialism and Narrative in Pynchon’s *V*.” *Modern Fiction Studies*, vol. 39, no. 2, 1993, pp. 307–25.
- Freer, Joanna. *Thomas Pynchon and American Counterculture*. Cambridge UP, 2014.
- Hardt, Michael, and Antonio Negri. *Empire*. Harvard UP, 2000.
- Harris, Michael. “Pynchon’s Postcoloniality.” *Thomas Pynchon: Reading from the Margins*, edited by Niran Abbas, Fairleigh Dickinson UP, 2003, pp. 199–214.
- Iverson, Douglas. “Outhouses of the European Soul: Imperialism in Thomas Pynchon.” *Pynchon Notes*, vol. 40–41, 1997, pp. 134–43.
- Jameson, Fredric. *Postmodernism, or, the Cultural Logic of Late Capitalism*. Duke UP, 1992.
- Mendelson, Edward. “Gravity’s Encyclopedia.” *Mindful Pleasures: Essays on Thomas Pynchon*, edited by George Levine and David Leverenz, Little Brown, 1976, pp. 161–95.
- Poirier, Richard. *The Performing Self: The Compositions and Decompositions in the Languages of Contemporary Life*. New Brunswick, 1992.
- Pynchon, Thomas. “Sloth.” *Deadly Sins*, William Morrow, 1993, pp. 10–23.
- . *V*. Harper, 2005.
- Said, Edward. *Culture and Imperialism*. Vintage, 1994.
- Seed, David. *The Fictional Labyrinths of Thomas Pynchon*. U of Iowa P, 1988.
- Tanner, Tony. *City of Words: American Fiction 1950–1970*. Harper & Row, 1971.
- . *Thomas Pynchon*. Methuen, 1982.

- Witzling, David. *Everybody's America: Thomas Pynchon, Race, and the Cultures of Postmodernism*. Routledge, 2008.
- アガンベン, ジョルジョ 『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』 高桑和巳訳, 以文社, 2003年.
- 市野川容孝 「安全性の装置——権力論のための一考察」 『現代思想』, 第25巻, 第3号, 1997年, 124-37頁.
- 市野川容孝, 村上陽一郎 「安全性をめぐる」 『現代思想』, 第27巻, 第10号, 1999年, 70-91頁.
- 柴田元幸 『アメリカン・ナルシス——メルヴィルからミルハウザーまで』 東京大学出版会, 2005年.
- ドゥルーズ, ジル 『記号と事件 1972-1990 の対話』 宮林寛訳, 河出文庫, 2007年.
- フーコー, ミシェル 『安全・領土・人口——コレージュ・ド・フランス講義 1977-1978年度』 高桑和巳訳, 筑摩書房, 2007年.
- . 『生政治の誕生——コレージュ・ド・フランス講義 1978-79年度』 慎改康之訳, 筑摩書房, 2008年.
- 三浦玲一 「病とヒッピーと新自由主義——トマス・ピンチョン『ヴァインランド』」 『アメリカ研究』, 第45巻, 2011年, 39-56頁.